楠木太郎氏の庭

〈登場人物〉

加藤浩次（不動産会社の営業主任）
杉本正文（失業中の元鉱山技師）
田中幸雄（市の公園緑地課課長補佐）
ひとみ（劇団員）
少年Ｑ（小学三年生）
正男（プロポーズする男）
正子（プロポーズされる女）
母親１（優香ちゃんのママ）
母親２（拓也くんのママ）
母親３（剛志くんのママ）
母親４（未来ちゃんと光くんのママ）
幽霊（元探偵）

１

スーツ姿のよれよれの中年にスポット。髪は乱れ、ネクタイはせず、靴も履いていない。幽霊である。

幽霊　探偵です……探偵でした。浮気調査専門の。浮気、多いんですよ。だから流行ってました。毎日毎日、尾行に張込み、盗聴盗撮。家に帰る暇もなかった……でもね、この仕事、嫌いじゃなかった。結構、楽しんでた。見張られてることに全然気づかない馬鹿どもに、何というか優越感があったのかな。おまえらは巧妙に隠してるつもりでも全部お見通しなんだって。俺の手のひらからは逃れられないってね。中には何となく気づくやつもいました。そいつらは始終オドオドしていて、それを見るのも面白

かった。浮気の証拠を提出して、さてこれからどんな修羅場が繰り広げられるか想像するのも……ところがある日、いつものように不倫相手を発見したんですが、どこかで見たような顔で……女房でした。俺の。浮気相手が俺の女房だった。漫画みたいだよね。でも本当の話……俺は、俺はもう頭に血が上って……。

暗転。

2

明りが入ると、そこは小さな公園のような場所。中央、やや下手よりにクスノキが一本立っている。クスノキには十歳くらいの少年が上るのに、そして大人が首を吊るのにちょうどいい高さに、ちょうどいい太さの枝が張り出している。その傍らに背もたれのないベンチ。他には何もない。公園というより空き地というべきか。近くに新築のマンション一棟が聳えるという設定。

季節は秋。午前九時頃。クスノキの木陰、ベンチに憩う二十代の母親1、2、3。それぞれの傍らにはベビーカーと赤ん坊（セルロイドの人形）。幽霊の男もいる。幽霊は以下の全ての場に出ているが、他の登場人物には全く見えていない。邪魔にならぬよう傍観者としてうろうろしているだけだが、登場人物の台詞に反応（頷いたり、笑ったり、肩をすくめたり、怒ったり、恥ずかしがったり）するし、ちょっかいも出す。ただし、最初と最後を除いて声は発しない。

母親たちは短冊にサインペンで何か書きつけている。

母親１　一句、とれたての赤ん坊を干す五月晴れ。

母親２　お見事。でも五月晴れは夏の季語よ、今はもう秋。

母親１　季語は五月晴れじゃなく、とれたてなの。

母親３　とれたてって、秋の季語？

母親１　実りの秋だからオッケー。それより見て、うちの優香ちゃんのほっぺ。ピンクがかって、産毛がきらきら。まるで水蜜桃。思わずかじりたくなっちゃう。

母親２　うちの拓也ちゃんだって。

母親１（母親２の赤ん坊の顔をのぞき）まあ、薄汚れて、湯気が出て。まるで道に落とした肉まん。思わず踏んづけたくなっちゃう。

母親２　平気よ、そういう言葉のイジメ。どーんと来いだわ。拓ちゃんはね、しし座の男の子なんだから。獅子は千尋の谷底から這い上がるの。

母親１　そこまで突き落とさないわ。だってこんなクソガキ、赤の他人だもの。うちの優香ちゃんはおとめ座。女の子は何たっておとめ座よ。おたくの肉まんがしし座なのは偶然でしょ。うちはね、ＮＡＳＡと同じスパコンで計算したの。おとめ座生まれにするために。計画的なの、天文学的なの、たまたまじゃないの、必然なの。大必然。

母親２　女の子じゃなくて、男の子だったらどうしたの？

母親１　えっ？

母親２　男の子が生まれたらどうするつもりだったの？

母親１　おとめ座としし座は相性が悪いのよ、知ってた？

母親２　ごまかさないで。話を変えないで。

母親１　だから、もしもおたくの肉まんが。

母親２　拓也ちゃん！

母親１　おたくの拓まんが将来、いけ図々しくもうちの優香ちゃんのことを好きにな

ったとしてもよ、幸いなことに相性が悪いの。それもかなり悪いの。

母親２　好きになんかならないわよ。

母親１　なるの、それは必然。必然の可愛さなの、うちの優香ちゃんは。

母親３　うちの剛志くんはかに座だから、おとめ座とは相性がいいわ。

母親１　かに座？　（母親３の赤ん坊を指し）それ、かに座なの！　かわいそう、選りによってかに座なんて。そういえばやけに赤い顔してると思った……一度茹でた？

母親３　茹でないわよ！

母親１　かに座ってことは……（指を折って）まあ、いやだ。あんた、ずいぶん暑い頃に仕込んだのね。汗水たらしてやったのね。汗疹がひどいのはそのせいかしら。

そこへ母親４、かなり年代物の乳母車を押して入ってくる。あきらかに女装をした中年男（オカマ）である。大柄、がっちりした体形。

母親２　あら、知らない顔。

母親３　でも威風堂々。

母親１　（母親４に）ちょいと、どちら様？

母親４　一句、冬瓜をのせてゆらせて乳母車。

母親２　お見事。冬瓜は秋の季語です。

母親１　あなた、もしかして、私たちの会に入りたいの？

母親４　はい。大きなクリの木でなくて、大きなクスノキの下で句会を催している今どき風流なお母さん方のサークルがあると、市の生涯教育課でうかがいましたんで、こうして都会の砂漠をはるばると。

母親３　遠くからいらしたの？

母親４　三千里ばかり向こうから。

母親２　ま、面白い人。

母親４　仲よく遊んでくださいますか。

母親１　それで、そのレトロな乳母車に乗せているのは、メスなの？　オスなの？

母親４　ふふっ、それは秘密。
母親２　ならばそっと星座を教えて。
母親４　（大声で）てんびん座。
母親２　てんびん座。
母親４　義理と人情を、愛情とお金を、出世と家庭を、罪と罰を、受験とクラブ活動を八百屋の店先の秤にかけて。
母親１　八百屋で生れたの？
母親４　あら、よく御存じ。
母親２　ずいぶん大きそうね。
母親３　もしかして去年生まれたの？
母親４　いいえ。
母親２　一昨年？
母親３　じゃあ、一昨々年？
母親４　いいえ、十年一昔。
母親１　この子、十年ものなの？
母親４　でも名前は未来と書いて。
母親２　未来と書いて。
母親４　みらいと読みます。
母親３　そのまんま。
母親１　その未来ちゃんのお顔、ちょっくらのぞかせてくださらない。
母親４　それはちょっと。
母親１　もったいつけるな。
母親４　もったいのうございます。
母親１　踏んづけたりしないから。
母親４　未来をのぞくと不幸になりますわよ。
母親１　いいじゃない、減るもんじゃなし。
母親４　ダメだって、ダメ！　（突然、男の声で）よせって言ってんだろ！

争った拍子に乳母車がひっくりかえる（実は幽霊がひっくりかえす）。中から転げ出る大きな冬瓜。転がってぶつかって、ぱっくり割れる。

母親１　（悲鳴）いやーっ！
母親４　私の、私の未来ちゃんが！

暗転。

3

同じ場所。午後二時頃。市の公園緑地課の役人、田中と大手デベロッパー、三友不動産の加藤。ともに四十代の男。田中は東所沢市のネーム入りのジャンパー。ベンチに座っている。加藤はスーツ姿。幽霊はやや離れた場所で二人を見ている。

加藤　気がつかなかったんです。こんなところにこんな土地があったなんて。

田中　うかつでしたね（鼻をほじりながら）。

加藤（マンションを指して）あれを建てるときも、全然引っかからなかったですから。

田中　うかつでしたね（またほじる）。

加藤　東側の住宅の連中ともめていたんです。地盤への影響がどうのって。いいがかりなんですがね、補償金目当ての。だからつい、こっちのチェックがおろそかに。

田中　うかつでしたね（しつこくほじる）。

加藤（苛立って）ええ、うかつです。うかつでした！

田中　別に問題ないんでしょ、道路へのアクセスとか……日照権も関係なさそうだし（やっとほじりおえる）。

加藤　日照権もなにも、ここには家がない。

田中　住人がいるわけですから、権利侵害に対して苦情を申し立てることは可能です。

加藤　ここには誰も住んでいない。

田中　ちゃんと登記がされていますし、所有者はちゃんと住民登録もされています。ちなみに固定資産税、住民税、国民健康保険料もちゃんと払われています。

加藤　家がないじゃないですか。

田中　かまわないです。

加藤　かまわないって……そんなの住んでいることにはならないでしょ。おかしい。

田中　納めるべきものは納めているのだから、市としては文句のつけようがない。

加藤　掘立小屋もないんですよ、ここには。

田中　プール付の豪邸を建てようが、ダンボールハウスだろうが、それは所有者の自由。

加藤　とにかく連絡をとりたいんです。

田中　私もとりたいんです。ご相談したいことがありますし。

加藤　役所でも連絡とれないんですか。

田中　この通り、電話もありませんし（笑）。

加藤　ここにいなくても、他のどこかに住んでいるんでしょ？

田中　わかりません。

加藤　じゃあ、税の通知や保険証はどこへ送るんです？

田中　もちろん、ここへ送付されます。

加藤　郵便受け、ないじゃないですか。

田中　ありますよ、ほら、ここ。（クスノキの洞を示す）

加藤　こんなところへ入れて……大丈夫なんですか。当人に届くんですか？

田中　届いているようです。

加藤　家族は？

田中　住民票によると、東所沢市あけぼの町三丁目四番九号。ここの住所です。世帯主、楠木太郎。妻子等の記載なし。家族はいないようです。

加藤　楠木太郎……偽名くさいな。これ、（木を指して）クスノキですよ。

田中　知ってますよ。これでも公園緑地課の役人ですから。クスノキ科の常緑高木、日本では暖かい地方に多く、高さは二十メートルにも達し、建築用や船をつくるのに使います。それから樟脳ができるんですよ、こいつの根や幹を蒸留すると……。

加藤　詳しい説明、ありがとうございます。それでは樹齢はいかほど？

田中　五、六十年、それ以上ということはないでしょう。ここらは戦争中、空襲で焼け野原だったそうですから。

加藤　楠木太郎氏が植えたんですかね。

田中　クスノキが気にいって、この土地を買ったのかも。名前にちなんで。

加藤　で、何の相談です？　楠木氏に。

田中　ああ、気になさらないで。

加藤　気になりますよ。

田中　ここを市に売却してくれないかと。

加藤　ちょ、ちょっと待った！

田中　あなたも買いたいんでしょ。

加藤　当然じゃないですか。

田中　市は十年以上前から購入を検討しているんです。あなたたちのマンションが計画されるずっと前から。そちらは問題ないんでしょ。邪魔になるわけじゃなし。

加藤　将来邪魔になるかもしれない。いや、なるでしょう。きっとなる。ここはうちの敷地に微妙にくいこんでいて、めざわりなんです。それに……。

田中　それに？

加藤　ここからマンションの一階から三階までが、のぞかれるんですよ。

田中　そうですかね。それほど気にならないと思うけどな。

加藤　気にする人もいるんです。地上げには苦労したんだ。それがこんなところを見逃がしたばっかりに冗談じゃない……市はここをどうしようっていうんですか？

田中　もちろん公園にします。

加藤　公園？　ここに公園？　いらない、いらない。いらないです。

田中　いるかいらないかは私が、いや、市が決める。あんたの指図はうけない！

加藤　すみません、でも……。

田中　見てください。ここは実質的に公園なんです。だが法的には個人の土地、個人の庭です。だから市が買い取って、正式に公園にするんです。いけませんか？

加藤　別にいけないなんて。

田中　名前も決まっています。第八仲よし広場。本当は第五仲よし広場になる予定だっ

たんですが、購入できないので他のところが先に決まり、第八になってしまった。

加藤　実質的に公園とおっしゃるが、誰もいないじゃないですか。

田中　今はいません。ポピュラーな場所じゃありませんから。どちらかというと、知る人ぞ知る、公園マニアのための公園です。温泉で言えば山奥の秘湯みたいな。

加藤　やっぱりまずいな……ところでこの公園、というかこの土地ですが、こんなにおかしな形なのはなぜなんですか？　両端がとがって、まるで……そう、ラグビーボールだ。

田中　ラグビーボールはとがっていませんよ。とがっていたら刺さって危ないでしょ。私、高校のときやってたんです、ラグビーを。

加藤　ラグビーボール、みたいな。

田中　それなら結構……ポジション、聞かないんですか？

加藤　え？

田中　普通聞くでしょ、私のポジションを。

加藤　（渋々）どこなんですか？

田中　フッカーです。

加藤　ああ。

田中　知ってるんですか？

加藤　いいえ。

田中　スクラムの第一列のまん中にいて、ボールを足でかき出す……。

加藤　（聞いていない）しかし、よくこんな変な形の土地を買ったなあ。

田中　おかしな形でも一向にかまいません、公園としては。

加藤　どうしても公園にしたいんですね。

田中　したいというのとは違う。ここは実質的に公園にもかかわらず、公園の名がついていない。つけることができない。それは役人として許しがたい。役人が唯一こだわること、気にすることは何だか知っていますか？　縄張りを侵されることです。この土地の存在そのものが、公園緑地課課長補

佐の私、田中幸雄の縄張りにくいこんでいるんです。

加藤　それでわざわざついてきたんだ。

田中　正々堂々とやりたいから。

加藤　じゃあ、私のこともよくご存知で。

田中　三友不動産青葉支店営業部主任、加藤浩次。暴力団顔負けの地上げの鬼。バブルの頃には手段を選ばず、法律すれすれのことをやってのけた社内きってのやり手。あなたに狙われた地権者は蛇に睨まれた蛙も同然。

加藤　ずいぶん買いかぶられたもんだ。

田中　加藤さん、私、もうこれ以上はないんです。わかります？　これ以上出世は見込めない。課長補佐が終点なんです。高卒だから。定年まで勤めあげ、後は年金暮らし。

加藤　結構じゃないですか。

田中　ですからね。この場所には徹底的にこだわってやろうと思うんです。伝説の地上げ屋の足をひっぱってやろうと。

加藤　宣戦布告か。慣れないことをすると火傷しますよ。

田中　そちらこそ、公権力をみくびると足をすくわれますよ。

にらみ合ったまま、暗転。

4

同じ場所。夜、十時頃。ひとみ（二十代後半）がいる。くたびれたジャージにスニーカー姿。

ひとみ　あー、あー、あえいう、えおあお。

軽くストレッチ。発声練習を始める。あたりをはばかるような小さな声で。

ひとみ　あえいうえおあお。かけきく、けこ

かこ。させしす、せそさそ。

ひとみ、座ったままで独白。幽霊、じっと聞いている。

ひとみ　今度、私……主役をやらせてもらえるかもしれません。まだ正式には決まっていないんです。候補が三人もいて、オーディションですから。タイトルは『ゴドーはながめながら』っていうんです。ベケットの『ゴドーを待ちながら』のパロディというんでしょうか。『ゴドーを待ちながら』はヴラジーミルとエストラゴンっていう二人が田舎道でゴドーっていう人を待ってるんですが、なかなか来ない。というか、結局来ない。ただ、それだけの劇です。それでうちの劇団の作家が書いた『ゴドーはながめながら』は実はゴドーさんは待っている二人のようすを遠くからながめているという話です。私の役はヴラジーミル。男の役なんですが、女性がやるのも面白いって演出の人が……かっこいい役じゃないですよ（笑）。何か、薄汚くて、愚痴っぽくて、理屈っぽくて、哀れな男の人です……夕暮れ。一本の木が……一本の木があって（クスノキを見上げる）。

ひとみ、立つ。幽霊、観客席へ。

ひとみ（『ゴドーはながめながら』のヴラジーミルの台詞）俺はね、ゴドーさんが遠くからここをながめてるような気がするんだ。望遠鏡かなにか使ってね。こっちを見ている。きっとそうだ。何をって？　俺たちに決まってるだろ。俺とおまえをさ。俺たちがどんなやつらかを観察してるんだよ。こうやって（望遠鏡をのぞく仕草）……それから俺たちが何をしゃべってるか……おそらくゴドーさんは読唇術の名人なんだ。読唇術を知らんのか？　唇を読むんだよ。

それで俺たちがいろいろ文句を言ってるのが筒抜けになっちまう……人参？　人参はもうないんだ。大根しかない。（ジャージのポケットをさぐって）きのう食べちまったろう……ああ、こんなしけた話もすべて聞かれちまってるんだ。

暗転。

5

同じ場所。午前十時頃。杉本正文（四十代）を追う加藤。しばらく舞台上で追いかけっこ。二人ともスーツにネクタイ姿。幽霊、興味深そうに眺めている。

加藤　どうして逃げるんです。

杉本　あなたが追うから。

加藤　だって、あなたが逃げるから。

杉本　しかたないでしょ、あなたが追ってくるんだから。

加藤　追ってるわけじゃない……わかりました。もう追いませんから、逃げないで。

杉本　どうして追ってくるんですか？

加藤　だから、追っちゃいないって！

加藤近づく。杉本、飛びのく。

加藤　じゃあ、この距離で。ね、私、これ以上近づきませんから。

杉本　ほんとですか？

加藤　約束します。だから話を聞いてください。私、加藤といいます。

杉本　つかまえませんね。

加藤　つかまえません。

加藤、ベンチに座り込む。杉本はすぐ逃げ出せるように立膝。

加藤　あなた、楠木さんでしょ？
杉本　は？
加藤　楠木さんでしょ。
杉本　（クスノキを指し）ああ、これね、クスノキですよ。
加藤　そうじゃなくて、あなた、楠木太郎さんでしょ？
杉本　私？　違います。
加藤　ほんとに？　あなたのこと、ここで何度も見てるんですよ。だからてっきり。
杉本　杉本です、私。スギモト。クスノキじゃなくてスギです。木が違います。まだ気が違ってはいませんけど（笑）。
加藤　楠木さんとお知り合いでは？
杉本　いいえ。
加藤　全然ご存じない？
杉本　存じません。どういう人ですか？
加藤　この土地の所有者です。
杉本　ここの？　所有者は市じゃないんですか。公園なんだから。
加藤　公園じゃないんですよ、ここ。個人の土地なんです。個人の庭なんです。
杉本　でも誰も住んでいませんよ。
加藤　誰も住んでいなくても、そうなんです。市の役人が言ってたから間違いない。
杉本　みんな、公園だと思っていますよ。
加藤　公園なら普通プレートがあって……大体、名前がないでしょ、ここには。
杉本　ありますよ。
加藤　あるんですか？
杉本　ええ、楠木公園、楠木広場。あけぼの三丁目公園と呼ぶ人もいます。それからたけのこ広場。それから……ラグビー広場。似てるでしょ、ボールの形に。
加藤　ラグビーボールはとんがっていませんよ。とんがっていたら刺さって危ない。
杉本　やってたんですか、ラグビー？
加藤　いや私は……。
杉本　それから、首吊りの木公園。

加藤　首吊り？　首を吊った人がいたんですか！

杉本　ええ、何度かあったそうです。

加藤　何度も！

幽霊、急にオドオドし始める。杉本の〝首吊り、吊る〟という言葉に過剰に反応。

杉本　この枝、ちょうどいい高さらしいですね。吊った人に聞いたわけではないですが（笑）。

加藤　……。

杉本　今のおかしくなかったですか？

加藤　……。

杉本　周りに何もないでしょ。あのマンションが建つ前ですから。夜になれば誰にも見られないし。それに、ここからの景色が。

加藤　景色が？

杉本　素晴らしいんです、夜景が。何もかも、どうでもよくなるような景色。このまま死んじゃおうって思える景色らしい。吊った人に聞いたわけではないですが（笑）。

加藤　……。

杉本　今のおかしくなかったですか？

加藤　……。

杉本　実際に見たわけじゃないんです。

加藤　何を？

杉本　首吊りです。聞いただけですから。

加藤　普通見ませんよ、そんなもの。

杉本　ですよね。でも、あのマンションの住人が、朝起きてカーテンを開けて、ふとこのあたりに目をやったら、首吊りのそれがぶーらぶらなんてことも。

加藤　そうだ、そういうこともある。

杉本　実は数か月前にもあったんですよ。奥さんを殺しちゃったらしいです、その人。その後、ここで（首を吊る真似）……。

加藤　何で奥さんを？

杉本　そこまで知りませんよ。

加藤　ここで自殺……（幽霊、加藤と目が合い、思わず顔をそむける。加藤は全く気づいていない）。

杉本　そうか、ここは公園じゃないんだ。

加藤　何をしてるんですか、ここで？

杉本　私？　何もしてません。

加藤　何もしてないって、まだ定年という歳でもないでしょう。平日の昼日中、公園でのんびりできる身分じゃないでしょう。それともそういう優雅なご身分なんですか？

杉本　したくてこうしてるんじゃない。

加藤　……。

杉本　リストラです。でも女房にはクビになったこと言ってないんです。言えないんです。だから毎日、出勤するんです。必死に就職活動してますが、この歳になると……。

加藤　たいへんですな。

杉本　おたくはリストラ、大丈夫ですか？

加藤　私は今のところ心配してません。

杉本　心配してないって、まだ定年までだいぶあるでしょう。平日の昼日中、公園でうろうろできる身分じゃないでしょう。それともそういう優雅なご身分なんですか？

加藤　したくてこうしてるんじゃ……仕事ですよ、これも。私、デベロッパーだから。

杉本　ああ。

加藤　（自慢げに）三友不動産です。

杉本　（素っ気なく）ああ、三友ね。

加藤　（馬鹿にした風に）ご存知で？

杉本　私、三友鉱山にいたんですよ。

加藤　三友鉱山！　同じ三友グループじゃないですか。

杉本　同じ三友グループじゃないですか、ときたか（舌打ち）。うちは親父も三友鉱山なんですよ。親父の頃は鉱山は花形産業だった。三友では鉱山、金属、造船、商事が四天王で不動産なんて三友グループの末席だった……それが時代は変わって不動産屋ごときが。

加藤　その鉱山をクビになったんでしょ。

杉本　仕方ないんです。もう日本に穴を掘るところなんて残ってないから。私、エンジニアだったんです、穴堀りの。根っからの現場の人間だからつぶしがきかないっていうか。

加藤　その穴掘りのプロがどうして……。

杉本　アフリカにも行きました。モザンビーク。チタニウムの鉱山です。レアメタルっていってコンピュータやロケットにも使うんです。でもちょっとしかとれないんだ。一トンほじり出して、（指の先を見せる）これだけですよ、たったのこれだけ。

加藤　なら、アフリカへ行けば……。

杉本　採掘権の奪い合いなんだ、欧米のやつらと。あいつら手段を選ばないから、人がいい日本人なんてすぐに除け者……ああ、掘りたいな。もう何年も掘ってないもんな。

加藤　温泉でも掘ったらどうですか。

杉本　温泉？　あんなもの、素人にだって掘れる。この国は世界中の火山の一割が集中してるんですよ。だからどこを掘ったって温泉なんて出てきますよ。あほらしい！

加藤　……。

杉本　なぜ私がここにくると思います？

加藤　リストラのこと奥さんに言えなくて、どこにも行くところがないからでしょ。

杉本　ここはね、におうんですよ。

加藤　におう？　このクスノキの？

杉本　地面の下からです。穴堀屋ならではの第六感。ここには何か埋まってる。確かです。

加藤　埋まってるって、チタンですか？

杉本　こんなところにチタンが埋まってるわけないだろ！　馬鹿か、あんたは！

加藤　じゃあ、何ですか！

杉本　わかりません。

加藤　なーんだ。

杉本　データが少ないからです。医者だってレントゲンを撮ったり、血液検査をしなき

や病気を特定できないでしょう。だがね、名医なら顔を見ただけで異常がわかる。それと同じ。何かがある。それは確か。

加藤　まさか遺跡とか、古墳の類じゃないでしょうね。ああいうのはまずい。文化財がどうのって連中が掘り返して、ブルーシートなんて張られたら景観が台無しだ。あいつらにかかったら、昔のものは何でも保存しなきゃならないんだ。田んぼや集落の跡とか、そんなものどうだっていいじゃないか。一年も工事を中断させて、見つけたのは甕の破片と鍬の先っぽだ。おかげでこっちは大赤字で……。

杉本　そんなんじゃないですよ。エネルギーっていうか、フォースっていうか……俺はここにいるぞっていう声、ささやきです。

加藤　誰かいるんですか……あ、死体？　死体でしょ？　それも殺された死体がある んだ。この木の下あたりじゃないですか？

杉本　クスノキの下には死体が埋まってるって。そりゃ桜です。

加藤　首吊りの木なんでしょ。浮かばれない霊が呼ぶんじゃないかな。

杉本　もっとましなものが考えられないんですか。例えば埋蔵金とか。

加藤　埋蔵金ですか！　埋蔵金があるんですか！　そうだ、あなたは金属を掘ってたものね。金目のものにはビビッと反応するんだ！

杉本　たとえばの話です。何かなんてわからない。ただ、土の中から伝わってくるんですよ。でも公園だと思っていたから、掘ろうなんて夢にも思わなかった。だが個人の庭なら、交渉してみる余地はありますね。

加藤　ここを掘ろうっていうんですか？

杉本　持ち主の了解がとれればかまわんでしょ。誰でしたっけ。楠木三郎さん？

加藤　太郎です。あなた、そんなことして何になるの？　就職活動は？

杉本　就職先なんてどうせないし。ぼーっと

してるより、体を動かした方が。

加藤　一人で？　スコップで？

杉本　重機入れるわけにいかないし。あれ、借りると結構するんですよ。

加藤　やめてください。

杉本　どうして？

加藤　私、あのマンションの開発業者なんですよ。

杉本　穴はいけませんか？

加藤　首吊りも困るが、穴も困る。

杉本　あなたの大事なマンションの敷地に残土を放ったりはしませんよ。

加藤　あたりまえです。穴は危ない。子供や年寄りが落ちたらどうするんですか。

杉本　ここは個人の土地でしょ。だったら穴を掘ろうが、ピラミッドをつくろうが自由なんじゃないですか？　危険だというなら囲いでもしますよ。

加藤　正直に言います。見栄えが悪いんです。今、マンションの入居申し込みの最中なんです。それが、こんなところに穴があったら、不安になるじゃないですか。

杉本　その気持ちはわかります。穴には不思議な魅力があります。穴があればのぞきたくなる。なりませんか？

加藤　まあ。

杉本　その先に何があるか見たくなる。これは古今東西、変わらぬ人間の心理です。小さい穴ならのぞくだけで我慢しますが、少し大きくなれば手を突っ込んでみたくなる。そしてもっと大きくなれば入ってみたくなる。おむすびころりんの爺さんしかり、不思議の国のアリスしかり。穴の先には何があるか。鼠浄土があり、奇妙奇天烈な世界がありました。人は穴の奥にワンダーランドがあると知っていて……。

加藤　もう結構。でもね、穴を掘りたくても、ここの所有者に許可を得なくてはならない。

杉本　どこにいらっしゃるんですか？

加藤　それをあなたに聞こうと思ったんじゃないですか。

杉本　ここにはいろんな人がきます。楠木氏を知っている人がいるかも。

加藤　常連さん、ですか？

杉本　私などまだ新参者だ。真夜中や朝早くに出没される方もいるようです。

加藤　杉本さん。楠木氏の居所をつきとめたら、私に教えてくれませんか。只とはいいません。それなりのお礼はさせていただきます。

杉本　さがすつもりですよ。私はぜひここを掘ってみたい。その許可を得るために。

加藤　まだ言ってるんですか。

杉本　あなたはどうするつもりなんですか。何か建てるんですか？

加藤　建てません。このままにしておきます。

杉本　なら、掘らせてくれませんか？

加藤　だから、穴はダメだって！

杉本　では教えません。

加藤　わかりました。検討はします。

杉本　ほんとかなあ。

加藤　そのかわり杉本さん、約束してください。市の役人には絶対に教えないと。

杉本　役人？

加藤　公園緑地課の田中といって小太りで、人と話をしながら鼻をほじる失敬なやつです。

杉本　ああ。

加藤　知ってるんですか？

杉本　たぶん、その人だと思う。ときどき見かけますよ。目つきが悪いから刑事かと思ってた。リストラ中だけど、別に悪いことしてるわけじゃないから平気でしたが。

加藤　しょっちゅううろうろしてやがるのか。

杉本　そこは三友グループ同士ということで。役人は何を企んでいるんです？

加藤　正式に公園にしたいんだそうです。

杉本　変な遊具を置いたり、余計な植栽を入れたりするんでしょ。公園使用のルールと

か、うるさいこと言うんだろうし。間違っても穴なんて掘らせてくれないだろうし。

少年Qが下手より入ってくる。小学三年生（小柄な若い女性によって演じられる）。半袖シャツに半ズボン。頭に船長帽をかぶり、首から双眼鏡を下げている。

杉本　あ、Qちゃん。

加藤　キューちゃん？

杉本　ここの常連です。彼は楠木氏、知らないだろうなあ。

加藤　何者です。

杉本　彼？　船長です。

加藤　はあ？

杉本　（少年Qに敬礼）　船長殿、おはようございます。杉本甲板員であります。

少年Q　おはよう。そっちは？

杉本　（加藤に）あなたもやりなさい。

加藤　えっ？

杉本　私がやったように。

加藤　ええっ！

杉本　早く！

加藤　せ、船長殿、おはようございます。自分は、自分は加藤主任……じゃなくて。

杉本　甲板員。

加藤　かん、かんぱん、です。

少年Q　汚いな。

加藤　はっ？

少年Q　甲板が汚れている。ちゃんと掃除はしているのか。たるんでるぞ。

杉本　申し訳ありません。すぐにきれいにいたします。船長殿、本日はユミ一等航海士殿はご一緒ではないのですか？

少年Q　水疱瘡だ。保育園でうつされた。

少年Q、クスノキの枝に上る。双眼鏡で辺りをうかがう。

加藤　あれ、何ですか？
杉本　ですから、船長です。
加藤　一等航海士がどうのって。
杉本　ユミちゃんです。Ｑちゃんの妹。三歳……四歳だったかな。
加藤　だから、これは？
杉本　Ｑちゃんにとって、ここは船なんです。ほら、この公園、船にも似ていますよね。
加藤　……まあ、言えなくもない。
杉本　船長によれば、ここはあけぼの丸という帆船で、（クスノキを指し）あそこがマスト。今、見張り台にいるというわけです。
加藤　つまり、船長ごっこ、航海ごっこですか？
杉本　ええ、結構本格的ですよ。
少年Ｑ　右舷に島が見えるぞ！
加藤　島？
少年Ｑ　メインマスト、張れ！
加藤　（杉本に）な、何が始まるんですか？
杉本　メインマストを張れって……メインマスト、張ります。
少年Ｑ　ぐずぐずするな！
杉本　加藤さん急いで！
加藤　どうすりゃいいんです？
杉本　こうです。こう（ロープを操るしぐさをする）。
加藤　こうですか？（杉本の真似をする）
少年Ｑ　測深索、おろせ！
加藤　何か言ってますよ。
杉本　測深索というのは、水深をはかる道具です。船が座礁しないようにする。
加藤　どうすりゃいいんです？
杉本　そこに落ちてる紐、投げてください。
加藤　どこへ？
杉本　ですから海に。
加藤　海って？
杉本　そこから先は海です

加藤、公園の外へ紐を放る。二人、ロープを固定するしぐさ。幽霊も参

加。

加藤　何で、こんなことしなきゃならんのですか？

杉本　今日はまだいい方です。嵐の中の航海のときはたいへんだった。

加藤　あなたもつきあいがいいというか、かなり変わってる……あの子、小学生でしょ？

杉本　三年生です。

加藤　学校、休みじゃないでしょ。

杉本　あまり行かないみたいです。というか、ほとんど。

加藤　イジメ？

杉本　ああいう子だから教室に落ち着いていられないんですよ。授業なんて退屈でしょうし。それより空想の世界で遊んでいた方が楽しいんでしょう。

加藤　遊んでくれる大人もいるし。

杉本　私ね、娘は二人いるんだけど、ほんとは男の子がほしかった。女の子なんて夏場の野菜みたいにちょっと見ないうちにどんどん大きくなって、あっという間に女房のミニチュア版だ。可愛い時期なんてほんの一瞬です。Qちゃんはね、空想八割、いや九割かな、それと現実一割で生きている。面白い子ですよ。

加藤　Qちゃんって、本名なんですか？

杉本　本名は知りません。みんながそう呼んでいるんで。Qはアルファベットのqらしいですよ。クエスチョンのQ。

加藤　クエスチョンのQ……少年Qか。少年Aよりはましか。

少年Q　あの左舷前方に見える巨大な船は何だ？

加藤　（杉本に）また何か言ってますよ。

杉本　船長殿、巨大な船といいますと、あちらの白い、十階建てのあれでありますか。

少年Q　そうだ。

杉本　あれは……（加藤に）あのマンション

の名前。あなたの会社が建てたんでしょ。
加藤　サファイア・マンション。
杉本　サファイア？　そりゃまたゴージャスな名前だね。
加藤　施主の趣味だから。これがまたすごい成金ババアで、しわだらけの指に飴玉みたいな宝石いっぱいつけて……。
杉本（少年Qに）船長殿、あれはサファイア号です。強欲な女海賊の船だそうです。
加藤　そんなこと言ってないでしょ！
少年Q　海賊の分際で、サファイア号とは笑止千万。
加藤　笑止千万って。Qちゃん、すごい言葉知ってるなあ。
少年Q　砲門、開け！
杉本　砲門、開け！
加藤　何ですか、ほうもんって？
杉本　大砲ですよ、大砲。
少年Q　海賊船に照準合わせろ！
杉本　海賊船に照準合わせました。
少年Q　撃て！
杉本　撃て！
加藤　……。
杉本　加藤さん、大砲やって！　ドカーンって。
加藤　ええっ！
杉本　お願いしますよ。
加藤（渋々）ドカーン。（大砲を撃つしぐさ）
少年Q　砲手、弾が届かないぞ！
加藤（大声で）ドカーン。
少年Q　今度は飛びすぎだ！
加藤（少し声を落として）ドカーン。
杉本　命中！　敵船、被弾しました。
少年Q　馬鹿者、かすっただけだ！　撃て、撃ち続けろ！
杉本　加藤さん、お願いします。
加藤（半分自棄で）ドカーン、ドカーン、ドカーン、ドカーン。ドカーン。
杉本　なかなかやるなあ。
加藤　冗談じゃないですよ。

杉本　休まず撃って！
加藤　あんたもやりなさいよ。
杉本　では一緒に……ドカーン。ドカーン。
少年Ｑ　撃ち方やめ！
杉本　やめーっ！
少年Ｑ　あの船は幽霊船だ。
加藤　何だって？
杉本　幽霊船だそうです。
加藤　幽霊船！

幽霊、幽霊船の言葉に大げさに反応する。

少年Ｑ　船員の姿が見えない。
加藤　まだ入居者はいないから。
少年Ｑ　何ということだ。我らは幻に向かって砲撃をしていたのだ。
加藤　早く気づいてくださいよ。
杉本　船長、どうされますか？
少年Ｑ　ほうっておけ。まもなく邪悪な幻は朽ち果て、崩れ落ちるのだ。
加藤　これからオープンなのに、縁起でもないなあ。

少年Ｑ、木から下りてくる。

杉本　船長、どちらへ？
少年Ｑ　お昼。
杉本　ランチでありますか、ごゆっくり。

少年Ｑ、退場。

加藤　ああ、汗かいちゃった（ベンチに）。
杉本　今日は短い方ですよ。
加藤　毎日、こんなことやってるんですか。
杉本　面白いですよ。設定が毎回変わるしね。Ｑちゃん、実によく勉強してる。博識です。
加藤　感心してる場合じゃないでしょ。ドカーンをやってる間に就職活動しなきゃ。
杉本　Ｑちゃんと遊んでると、どうでもよく

なっちゃうんです。

加藤　彼は反対するんじゃないですか。

杉本　何を？

加藤　穴を掘るつもりなんでしょ。そうしたらあの子の大事なこの船……何でしたっけ？

杉本　あけぼの丸。

加藤　あけぼの丸の甲板に穴を開けることになる。船長殿は許さないのでは？

杉本　そう来ますか。でも私は丸めこむ、いや説き伏せる自信があります。子供は、男の子は穴が大好きなんです。

暗転。

6

同じ場所。朝、九時頃。母親２、母親３、母親４がベンチに。俳句の会である。それぞれの傍らにはベビーカー。母親１はいない。幽霊、つまらなそうに欠伸。

母親４　一句、女郎花、むずがる声が通り過ぎ。

母親２　お見事。季語は？

母親４　女郎花。初秋の季語ざんすね。

母親３　新しい坊っちゃん、お肌つやつやして朝日を照り返してるわ。

母親４　毎日欠かさずワックスかけてるの。玉磨かざれば光なし。それで安易に光ちゃんと名付けました。冬瓜の美少年ざんす。

母親２　割れちゃったお嬢ちゃんは？

母親４　夭折の娘は味噌汁の具になりました。おいしゅうございました。

母親３　やっぱり冬瓜がいいの？

母親４　いろいろ試してみたけれど、冬瓜が一番。西瓜はデザインがうるさいし、南瓜は顔が汚いでしょ。白菜は枯れた葉がはが

れてくるし。
母親２　キャベツは？
母親４　候補にはなったんだけど、毛唐がよくキャベツから子供が生まれるなんてほざくでしょ。だから、ちょっと抵抗がね。私、純粋に和風のオカマだし。
母親２　優香ちゃんのママ、大丈夫かしら？
母親３　かなりショックだったから。
母親２　ノイローゼ状態。八百屋さんに行けなくなったって。
母親３　優香ちゃんに一日中ヘルメットかぶせているらしいわ。
母親４　安全第一ざんす。
母親３　……あら、いやだ！　うちの剛志ちゃんのほっぺに蟻がたかってる。
母親２　お菓子の食べかすでもくっついてたんじゃないの。
母親４　うちの光ちゃんには蝿がたかるの。
母親２　蟻んこといえば、この間姉のところへ遊びにいったら、甥っ子の勉強部屋に面白いものがあったの。
母親３　面白いものって？
母親２　蟻の巣観察キット。
母親３　蟻の巣？
母親２　観察キット。
母親３　蟻の巣を観察するの？
母親２　そう。蟻の巣のトンネルがガラス越しに見られるの。これくらいの箱で。
母親３　つまり、蟻を飼ってるの？
母親２　まあ、そういうことかしら。
母親４　食べるの？
母親２　食べないわよ……蟻って、食べられるの？
母親３　いるんじゃない。世界のどこかには食べる人たちが。
母親４　甥っ子さん、大アリクイ？
母親２　違うわよ！
母親３　それって、面白いの？
母親２　面白いんじゃない。蟻の生活をのぞくわけでしょ。

母親３　のぞきね。
母親２　のぞきは面白いわよ。蟻でも何でも。
母親４　……気づいてるのかしら。
母親３　え？
母親４　だから蟻んこは気づいてるのかしら、のぞかれてることに。
母親２　向こうからもちゃんと見えてるんじゃないの。一応眼があるんだし。
母親３　見えてるかもしれないけど、意識するのかしら。
母親２　蟻が？
母親３　そう。人間のやつ、今日ものぞいてやがるなって。
母親２　のぞかれてると思って、緊張したり、かっこつけたりするの？　蟻が？
母親３　しないわよね。
母親４　胡麻風味なのかしら蟻んこって。
母親３　まだ言ってる。
母親４　甥っ子に聞いといて。
母親２　食べないったら！
母親３　ねえ、甥っ子さん、名前つけてるんじゃない。その蟻たちに。こいつはシンゴ、こっちはマサヒロ、この大き目のはゴロウなんて。
母親２　蟻はほとんどがメスよ。
母親３　メスなの？　オスはいないの？
母親２　オスは女王蟻とあれするためだけにちょっとだけいるの。それで働き蟻は子供を産まないメスなの。
母親４　きっとオカマもいるわ。
母親３　卵を産むのは女王様だけなんだ。
母親４　そう考えれば、あなたたちってすごいわね。女王様なんだものね……あら、かゆい。
母親３　どうしたの？
母親４　蟻んこの話ばかりしていたせいよ、何だか背中がかゆくなってきた。
母親２　ほんとに蟻が背中に入ったんじゃない。むずむずする？
母親３　むずむずといえば、この公園に来る

と妙にむずむずしない。

母親2　そういえば……（母親４に）ちょっと、あなた、こんなところでブラはずすのやめて！

暗転。

7

同じ場所。夜、十時頃。二十代の男女、正男と正子。幽霊はクスノキのそばに。

正子　正男君。

正男　何、正子ちゃん。

正子　どうしてここ？

正男　え。

正子　どうして、ここなの？

正男　嫌？

正子　ここ、首吊りがあったのよ。

正男　そんなの噂だよ。（幽霊、否定して首をふるしぐさ）ここにはホームレスはいないし、暴走族の溜まり場でもないし、のぞきもいないしさ。穴場なんだよ。

正子　穴場って、正男君、前に誰かと来たの？　いつ来たの？　それ、私の知ってる子？

正男　そんなんじゃないって！

正子　……わかってる。正男君、そんなにもてないもの。

正男　……。

正子　（クスノキを見あげ）この木、気味が悪いわ。きっと丑三つ時になると、悪い男に騙されて身も心もボロボロにされた年増女や底意地悪い姑の仕打ちに耐えられない新妻がやってきて五寸釘を打つのよ……ほら、ここに釘の穴がある。

正男　もし、そういう丑三つ関係の人が来てもさ、僕らとは関係ないんだし。

正子　何言ってんの、馬鹿ね！　呪いをかけ

てるところを見たら、今度は私たちが呪われちゃうのよ。レディスコミックに書いてあったもの。鬼嫁、鬼姑特集に。

正男　……正子ちゃん、おふくろと同居するの、やっぱり嫌？

正子　そんなことないわよ。正男君のお母さん、やさしいもの。この間だって「（早口で）あら正子さん、正しい子って書くの？うちの正男ちゃんは正しい男だから、二人はさぞかし清く正しいカップルなんでしょうね、おっほっほ。そうだ、ねえあなた、小さい頃、まーちゃんて呼ばれてたでしょ。あら、今もそうなの。うちもまーちゃんなの。じゃあ、この家にまーちゃんが二人になるわけね。どうしようかしら、呼ぶとき。こっちもまーちゃん、こちらもまーちゃん、困っちゃうわね、おっほっほ」。

正男　……正子ちゃん、いつもそういう本、読んでるんだ。

正子　明美よ、明美が好きで買ってくるからつい……大体、正男君がいけないのよ。大事な日なのにレストラン、予約してないんだもの。

正男　したよ、一か月も前に。でもつぶれてたなんて。

正子　前の日に確認しないからよ。私、別の店でもよかったのに。

正男　金曜の夜なんて、どこもいっぱいだよ。それに居酒屋やファミレスは嫌だっていったの、正子ちゃんじゃないか。

正子　プロポーズの場所が白木屋やスカイラークだったなんて、明美に言えないじゃない。それなら公園みたいな所でもいいわって言ったら、正男君、「僕、いい場所知ってる」っていうから……まさか、ほんとに公園なんて……ごめん。私、言いすぎた。こそごめん。

正男　ううん、僕がドジだったんだ。僕の方

正子　ここでいい。

正男　でも……。

正子　どうしたの？

正男　誰かに見られているような……。

正子　ここ、のぞきはいないんでしょ。それに私たち、その、何かするわけじゃないし。

正男　何かって？

正子　だから、その、のぞきの人は見にくるんでしょ。その、恋人たちがいろいろしてるところを……キスしたり、その、もっと、エッチなことしてるところを。

正男　う、うん、まあ。

正子　……正男君、したいの？

正男　ええっ、したくないよ！

正子　……したくないんだ、私なんかと。

正男　したいよ、したい！　すごくしたいよ。正子ちゃんが、「正男君、もう嫌、やめて」って言うまでしたい！

正子　馬鹿……でも、ここじゃ嫌よ。

正男　わかってるよ。

正子　キスぐらいならいいけど。

正男　……あ、あの、正子ちゃん。プロポーズ、始めていいですか。

正子　はい。どうぞ。

正男　では、いかせて……いきます……正子ちゃん、正子さん。

正子　は、はい。

正男　ぼ、僕と、け、結婚してくだ、くだ、くだされますか？

正子　は、はい。く、くだされます。

正男　じゃ、これ（指輪を取り出し、正子の指に）……あれ、大きすぎた？

正子　大丈夫、ちょっとくらい大きい方がいいの。

正男　……キス、いい？

正子、うなずき目を閉じる。正男、正子に近づこうとして闇の中の光に気づく。

正男　ああっ！

正子　何、どうしたの！（驚いた拍子に指輪

を落とすが、気づかない）

正男　あ、あれ……。

正子　う、丑三つ参りよ、鬼嫁よ！　だから、こんなところ嫌だって言ったのに！

正男　丑三つ時には早いんじゃ。

正子　丑三つ時って何時なの。

正男　確か午前二時頃。

正子　じゃあ時間にルーズなやつよ、明美みたいな。いるのよ、そういうのがどこにもいるの！

二人に近づいてきたのは田中課長補佐。懐中電灯と殺虫剤の缶を持っている。

田中　こんばんは。

正男　こ、こんばん……（正子に）鬼嫁じゃないみたいだよ。

正子　じゃあ、のぞきよ。いるじゃないの！

田中　何してるんですか、あなたたち。こんなところで、こんな時間に。

正男　何って、そんなの、プロポーズに決まってるじゃないですか！

正子　そんなこと言わなくても。

田中　そりゃお邪魔しました。私、のぞきじゃありませんからご心配なく。プロポーズ、お続けください。どんどんやってください。遠慮なさらずに。

正男　何もしませんよ。キスぐらいです。

正子　そんなこと言わなくても。

田中　私は市役所のものです。公園緑地課課長補佐の田中と申します。決してあやしいものではございません。

正子　あやしいわよ、十分。

田中　仕事なんです。そこのクスノキに洞があるでしょう。穴ですよ、穴ぼこ。ほら、なんてね（笑）。その中にハチの巣があるらしいんです。

正男　わっ！（あわててとびのく）

田中　郵便配達が刺されたんです。やつらを

退治するのは夜、寝込みを襲わないとダメなんで、時間外ですがサービス残業。

田中、クスノキに近づき、木の洞に殺虫剤をふきつける。幽霊、逃げる。

田中　よーし、これでオッケー。

正男　公園緑地課はハチの巣退治までするんですか？

田中　公園に関することは全て。造園、植栽の手入れ、トイレや遊具の管理、修繕、清掃、公園内の催し、事故、犯罪等々のトラブルも、全て私どもの管轄であります。

正男　公園内でプロポーズをしてはいけないとかいうんですか。

田中　とんでもない。むしろ奨励したいくらいです。少子化対策に頭を痛めている市としましては、若い人たちにはどんどんプロポーズして、どんどん結婚して、どんどん子供を産んでいただきたい。（正子に）プロポーズ、もちろん受けたんでしょうね？子づくりの方もよろしくお願いしますよ。ＤＩＮＫＳなんて絶対ダメ。あんなの非国民です。出産から育児、教育まで市は全面的に応援させていただきます。児童手当てもたくさん出します。毎年でもかまいませんから、ぽこぽこ産んじゃってください。

正子　私、鶏じゃありません。正男君、この人、やっぱりおかしいわよ。どうして郵便屋さんがハチに刺されるの？　ここにはポストも配達先もないのに。

田中　その洞が郵便受けなんです。

正子　これが？　どうして公園に郵便受けがあるの？　誰が手紙を受け取るの？（皮肉っぽく）鳩さん？　それともリスさん？

正男（正子に）ここにはリスはいないよ。鳩は伝書鳩っていうくらいだから、きっと自分で出向くんじゃないかな。手紙なんて書かずに。

正子（苛立って）わかってるわよ！

田中　実はですね。ここはご覧の通り公園のようなもので、私は、いや市では公園にする予定なんですが、正式にはまだ公園ではないんです。個人の庭というのが正しい。

正男　個人の？　個人の庭ということは、僕ら不法侵入に……。

田中　法的にはね……誰も住んではいないが、郵便物がその洞に配られるんです。そしていつのまにかなくなっている。ここの持ち主が取りに来るんでしょうが、誰もその姿を見たことがない。楠木太郎というんですが、知りません……よね？

二人、首をふる。幽霊、落ちていた指輪に気づき拾うが、そのまま洞に放り込む。

田中　ハチの巣退治は表向き。郵便物を取りにくる楠木太郎氏に会えるのではと期待半分。

正男　あの、課長さんは、まだしばらくここにいるつもりですか？

田中　課長補佐。もう少し楠木太郎氏を張ってみようかと。気になります？　向こうへ行きましょうか？　キス、まだなんですか？　殺虫剤、残っているからあげましょうか？

正男　殺虫剤がどうして必要なんです？

田中　ハチはもう大丈夫だけど、蚊や毒虫がいるかもしれませんよ。そいつらが彼女のお尻にチクリとやらないとも限らない。

正男　彼女のお尻にって……そ、そんなこと、こんなところで、僕らがするわけないじゃない！

田中（正子のモノ真似）したくないんだ、私なんかと。

正男（つい反応して）したいよ、したい、すごくしたい！　正子ちゃんが「正男君、もう嫌、やめて」って……（我にかえって）何をやらせるんだ！

正子　（おびえた声）正男君。

正男　正子ちゃん、ごめん。どこか別の場所へ行こう。

正子　正男君、あ、あれ。

正男　どうしたの？

正子　誰かいる。

ひとみである。三人に気づかない。軽くストレッチ。いつものジャージ姿。

田中　女性のようですね。

ひとみ　（発声練習）あーあー、あえいう、えおあお。あえいうえおあお。

正男　ちょっと頭、おかしいみたい。

ひとみ　かけきく、けこかこ。かけきくけこかこ。けこかこ。

正子　結婚がどうのって。

ひとみ　させしす、せそさそ。させしすせそさそ。

田中　フランス語か？

ひとみ　（『ゴドーはながめながら』のヴラジーミルの台詞）それでゴドーさんは、いったいどうしようってんだ。哀れな俺たちをどうしようってんだ。ながめても面白くもあるまいに……それとも何かしてくれようっていうのか、俺たちに。俺たちのために何かお恵み下さるのか？　それじゃ、まるで……（三人に気づいて）あの、そこに誰かいます？

田中　あやしいものじゃありません。

ひとみ　ゴドーさんじゃないですよね。

田中　後藤ではないです。田中といいます。もしかして役者さんですか？

ひとみ　はい。いつもの方？

田中　え？

ひとみ　いつも遠くから見られてる。

田中　私、夜にここへきたのは初めてなんですが。

ひとみ　そうですか。

田中　公園緑地課の、市役所のものです。

ひとみ　市役所……すみません、国民健康保険料、ちょっと待って。

田中　保険料、滞納してるんですか？

ひとみ　国民年金の方？

田中　年金は年金機構です。私、公園緑地課です。課長補佐の田中といいます。

ひとみ　何だ、しまった。

田中　払っておいた方がいいですよ。病気したとき保険証がないと困るから。

ひとみ　お金、ないんです。でも私、ビタミンCは摂っているので、風邪ひとつひきません。『黒豚天国』、ご存知でしょ、トンカツ屋の。そこでキャベツを刻むバイトしてます。

正子　キャベツはビタミンCだけじゃないわ。ビタミンUとKがあって。

正男　さすが正子ちゃん。栄養学科卒。

ひとみ　十一時から夕方八時までキャベツを刻んでます。水曜の休日以外、毎日。うちの劇団は年に一回しか公演がありませんから。一年のうち十か月はキャベツ刻みです。

正男　そんなにキャベツがいるんだ。

ひとみ　『黒豚天国』はキャベツ食べ放題ですから。五回おかわりした人もいます。だから繁盛してます。一日に三百人。三百人ですよ。うちの劇団なんて、一日最高五十五人です。それも半分は身内。私なんて出番が少ないのにチケット三十枚がノルマなんです。長野の田舎から出てきたからこっちに知り合いもいないし、だからいつも売れ残って。

田中　長野ですか。私、生れは岐阜なんです。お隣ですね。こりゃ、奇遇だ。

正子　奇遇って、長野県なんて八つの県と接してるのよ。

正男　さすが正子ちゃん、長野にも詳しいんだね。

ひとみ　店に来るお客さんにチケット買って

もらいたいんだけど。そんなことすると店長さんに怒られるし、一日中店の奥にこもっていて店に出ることなんてないし。

田中　それなら私に言ってください。三十枚くらいさばくの屁でもありません。市役所には演劇好きが大勢いますから、そのくらいちょちょいのちょいですよ。

ひとみ　そんなの悪いですよ。

田中　市民のお役に立つのが役人です。

ひとみ　面白くないですよ、うちの芝居。

田中　なんのなんの。役人は面白いのは苦手なんです。面白くなくてちょうどいい。

正子（にやにやしながら）こりゃどうも、あれね。

正男　何が、あれなの？

正子　正男君、にぶいわね。

田中　トンカツ屋さんなら、食事は毎日トンカツですか？

ひとみ　いいえ。食べたかったら金払えって、店長さんが。キャベツだって、刻みながらときどき口に放り込んでいるんですが、そんなことするの私ぐらいです。

正子　キャベツの千切りなんて、専用の機械がないのかしら？

ひとみ　手作業とは味が違うそうです。うちの店は老舗ですから、機械は使いません。

正男　腱鞘炎になりそうだね。

ひとみ　それより、眠くなるのがつらいです。作業場ではトントントンと包丁でまな板をたたく音だけが響いています。寝不足でなくても段々まぶたが重くなります。それでも手は動いているのですが、段々、千切りの幅が広がっていくんです。お店の決まりで２ミリプラスマイナス０．３ミリでなきゃいけないんです。それ以上は廃棄処分です。ラジオもかけてくれないし。だから私、仕事しながら芝居の台詞をぶつぶつやってたんだけど、同僚のおばちゃんたちが、気持ち悪いからやめてくれって。

正子　それでここでお芝居の練習？

ひとみ　アパートも壁が薄いから。抑えてるんだけどつい大きな声になって。ここ、周りに何もないから……でもマンション建ったんですよね。うるさいかなあ。

田中　大丈夫ですよ、ここは公園なんですから。あんな腐れマンション、気にすることはないです。あ、ハチ、大丈夫でした？　さっき私が殺虫剤撒いときましたから。

正子　ここ、個人の庭なんでしょ。

ひとみ　公園じゃないんですか？

田中　すぐに公園にします。この私がします。第八仲よし広場にします。だから気にならず、存分にお稽古してください。

正子　課長さん、ずいぶん彼女の応援するんですね。もしかして、一目ぼれってやつ？

田中　課長補佐。私はあのマンションが嫌いなだけです。開発業者の加藤ってやつも。だから絶対、公園にします……それよりあんたら、プロポーズの続きはもういいの？

ひとみ　ここでプロポーズを？　すみません、お邪魔でしたね。

正男　大体は済んだので。

田中　キスはまだです。

ひとみ　プロポーズか。（正子に）どんな気分でした？　ドキドキするんですか？　いいなあ。私なんか、プロポーズなんてされないうちにおばあちゃんになっちゃうんだろうな。

正子　そんなことないわよ。あなた、きれいだもの。

田中　これから何度もありますよ。（正子を指し）この人なんか、最初で最後でしょうが。

正子　うるさいわね！

ひとみ　きれいじゃないです。劇団でも老婆の役ばかりなんですよ。

田中　私なんて、小学校の学芸会で木の役でした。木ですよ。それも桜とか松とかの種類も特定されないただの木です。もちろん台詞もなかった。

正男　あなたの学芸会と比べても……。

田中　それからの人生の役回りも似たようなものです。ただの木、ただじっと立っている木みたいなものです。（クスノキをたたいて）こいつと同じ。挙句に市役所に入ったら公園の木の世話です。枝が伸びすぎて通行の邪魔だ。毛虫がたかってる。カラスの巣がある。落ち葉が側溝にたまっている。花びらが散らかって汚い……。

ひとみ　じゃあ、私の人生は咲く前にいきなり萎れてしまうのかしら。

田中　そんなことないです。あなたは今幼虫なんだ。青虫です。キャベツをむしゃむしゃ食べる青虫なんです。蝶になるのはこれからですよ……あの、失礼ですが芸名は？

ひとみ　芸名なんてないです。ひとみです。

正子　やっぱり彼女に気があるんだ。課長さん、もしかして独身？

田中　課長補佐！　独身じゃいけませんか！四十二歳、厄年で独身だと問題なんですか！　独身は迷惑なんですか！　独身は変態なんですか！　独身は犯罪なんですか！

正男　そんなこと。

田中　けっ、プロポーズされたぐらいで天下でもとったつもりだ。

正子　私、そんな……。

田中　行きなさいよ、別の公園へ。（ひとみに）芝居のお稽古、続けてください。虫がいたら、この殺虫剤使ってください。私、邪魔なら向こうへ。

ひとみ　大丈夫です。私、一応役者ですから、人に見てもらった方がいいんです。

田中　そうですよね。そうだ、役者さんだもんなあ。女優さんだもの。

ひとみ　ここに来るのも、誰かに見てもらえるかも知れないと思ったから。大きい公園では恥ずかしいし、ここぐらいがちょうどいいんです。でも夜はここ、誰も来ませんね。

田中　まあ、こんなところでプロポーズしよ

うなんて物好きはそうはいないはずだし。

正子、急に何かをさがすしぐさ。

ひとみ　いつもは気味が悪いくらい静かです。静かだけど……。

田中　静かだけれど？

ひとみ　見られているんです。

正男　誰かいるんでしょ。

ひとみ　いえ、いません。誰もいないのに、感じるんです。

田中　気配がする？

ひとみ　ええ、誰かに見られている。それも遠くから。まるでヴラジーミルみたい。

田中　ブ、ブラをいじるんですか？

ひとみ　役の名前です。見ているのはゴドーさん。

田中　後藤ですか。やつは戸籍係ですが……。

正男　それ、気のせいですよ。自意識過剰。じゃなきゃ幽霊かな（幽霊、ドキッとする）。

田中（正男に）うるさいな、あんた。さっさと行きなさいよ。

正男　はいはい。

正子、あたりを這いまわってる。

正男　正子ちゃん、何してるの？

正子　ないの。

正男　何が？

正子　ないの。

正男　だから何が？

正子　……指輪。

正男　指輪って、婚約指輪？　どうしちゃったの！

正子　気がついたらないの。

正男　ないのって……そんな！

正子　この人たちが現れて、驚いた拍子にどこかへ落としたみたい。

正男　給料三か月分なんだよ！（田中に）ちょっと、あんたもさがしてくださいよ。そ

のライト照らして。大体、あんたが現れるから悪いんだ。

田中　知りませんよ、指輪のことまで。

正男　公園でのトラブルは管轄なんでしょ。

田中　遺失物は警察の管轄です。それにここはまだ公園じゃない。個人の庭です。

正男　ずるい！　さっきまで、ここは公園みたいなものだとか、私がすぐ公園にするなんて言っておいて。市民ですよ、私も正子ちゃんも納税者なんですよ！

田中　わかりました。でもこんなに暗くちゃ。明日の朝、明るくなってからにしましょ。

正男　その間に誰かに拾われちゃうかも。

田中　なら、ここで番をしてれば。

正男　朝までここにいろっていうんですか！

田中　しかたないでしょ。あなたの奥さん、奥さんになる人が落としちゃったんだから。そのくらい我慢しなさいよ。おかげで、忘れられない夜になったじゃないですか。

正男　あなた、他人事だと思って。

田中　他人事ですもん。それに私、独身だから、あなたのような幸せな方の気持ちもわからんですもん。

正子（泣きながら）正男くーん、ないよー。

正男　大丈夫、あるよ。僕ら、この辺から動いていないもの。絶対ある。

田中　甘栗みたいな大きなダイヤがついてることでしょうから、すぐ見つかりますよ。

ひとみ　あの、私、帰っていいでしょうか。もう練習は無理みたいですし。

田中　どうぞどうぞ。私は公僕なんで、仕方ないからもう少しつきあいますけど。

正子（ひとみに）待って！

田中　ひとみさん、関係ないでしょ。

ひとみ　お手伝いしたいのですが、明日も仕事が。寝不足になると、千切りの幅が。

正子　身体検査させて。

田中　な、何言ってるんだ、この女は！

ひとみ　私のこと、疑ってるんですか？

正子　ここには四人しかいないもの。田中課

長は身元が割れてるけど。

ひとみ　……私は貧乏だし。

正子　魔がさすってことも。

田中　おい何だ！　自分で落としておいて、人を泥棒扱いするのか！

正男　正子ちゃん、よそうよ。

正子　正男君、どうするの！　明るくなって、さがしても見つからなかったら。三か月分また貯めるの？　一年かかったんでしょ。結婚、もう一年伸ばすの？　それとも、もう私と結婚しないの？

正男　正子ちゃん。

正子（ひとみに）お願い、検査させて。あなたが拾ってないなら平気でしょ。させてくれたらお詫びに『黒豚天国』のトンカツ、好きなだけで食べさせてあげる。

ひとみ　嫌です、私。

正子、いきなりひとみに襲いかかり、体中さわりまくる。幽霊もおろおろ。

田中　おいっ、おい、やめろ！　このブス！

抗うひとみ。正子の手がひとみの股間に。

ひとみ（悶える）ああ。

正子　あっ！　硬い！　正男君、硬いものがある！　やっぱり……えっ？　これって……。

正男　どうしたんだ。

正子　この人、この人……。

暗転。

8

同じ場所。午前十時頃。いつものように俳句の会の面々。幽霊は横にな

っている。

母親２　一句、里芋の葉陰で憩う石仏。

母親３　お見事。里芋は秋の季語です。

母親４　……ねえ、お二人さん、ちょっくら見ていただきたいものがあるざんす。

母親３　唐突に何ざんしょ。

母親４　ジャ、ジャーン（乳母車から取り出したのは蟻の巣観察キット）。

母親２　あら、何よ、それって！

母親３　もしかして、それが噂の蟻の巣観察キット？

母親２　あなた、買ったの？

母親４　インターネットで二千円でした。あの日帰ってからなぜか蟻のことが気になって眠れず、布団の中で蟻が一匹、蟻が二匹、蟻が三匹と数え出す始末。それで思い切って。

母親２　まさか、食べた？

母親４　失礼ね……そりゃ、二、三匹は味見したけど……胡麻味ではないざんす。

母親２　やっぱり。

母親４　白蟻と混ぜればどうなのかしら。

母親３　（箱を見ながら）すごいわね。蟻の巣ってトンネルだらけね。

母親４　自分、ベトナムで戦っていた頃を思い出します。

母親３　米軍だったの？

母親４　ベトコンでした。地下トンネルでの暮らしは辛かった。

母親２　うそうそ。

母親４　ベトコンは真っ赤な嘘だけど、甥っ子さんの気持ちはわかりました。ごっつう楽しいです。それにね、こいつらわかってないざんすよ。

母親３　何が？

母親４　見られているってことに。

母親２　気づいてないの？

母親４　気づいてないの、全然。

母親３　馬鹿なのね、蟻って。

正男がシャベルと篩（ふるい）を積み、その上に青いビニールシートをかけた猫車を押して入ってくる。

母親３　あら、見かけない顔。

母親２　公園デビューかしら？

母親３　まあ、斬新なベビーカー。

母親４　頑丈そう。軽量化より安全性重視の車体だわ。

母親３　男よ、父親１だわ。

母親２　オカマじゃないようね。父子家庭かしら。

母親４（正男に）　一句、分け入れば紅葉が哀し、子捨て山。

正男　ああ、びっくりした！……こんにちは。

母親２　あら、反応悪い。

母親３　入会希望者じゃないのかしら？

母親４　どちら様？　ただの変態？

正男　変態じゃないです。

母親４　みんな、自分が変態だと気づいてないだけなのよ。

正男　善良な市民です。

母親４　善良な変態もいるのよ。

正男　そういうみなさんは？

母親２　見ての通り、赤ちゃんに日光浴させながら句作を楽しむ母親の会ですわ。

正男　くさく？

母親３　俳句を作るの。

正男　ああ、俳句ですか。五、七、五の。

母親３　字余りもオッケーよ。

母親２　父親もオッケーよ。もち、オカマも。

正男　僕、まだ子供は……。

母親４（猫車を指し）そちらは僕ちゃん？　嬢ちゃん？　おいくつ？

正男　これですか？　これはシャベルです。

母親４　あら、もうお喋りするの。

正男　シャベルと篩です。

母親２　古い？

母親３　生まれたばかりで、もう古いの？

正男　目の細かいやつ。
母親２　目が小さいの？
正男　はい。すごく小さいやつで。
母親２　心配しないで。目が大きければ可愛いってもんじゃないわよ。で、星座は？
正男　星座？
母親３　その子の星座。
正男　正子ちゃんのことですか？　四月生まれなんです。
母親２　おひつじ座か、おうし座ね。
正男　だから頑張ってダイヤモンド、買ったんです。
母親４　まあ、子供に！　ぜいたく！
正男　三か月分で。
母親２　まだ三か月なのに！
母親３　三か月でもう喋るの！　もしかして天才？
正男　天災ではないです。どちらかというと人災かな。
母親４　もう、じいさんなの？
母親３　老子かしら。
正男　あの、大事な句会の最中に恐縮ですが、ここ、掘らせていただけませんか。
母親４　掘るの！
正男　ここらに落としたのはまちがいないんです。こうなったら徹底的にやるしかない。このあたりを全部掘り起こして土を篩にかけて……（猫車のシートをはずす）。
母親３　あら、僕ちゃんでも嬢ちゃんでも。
母親４　冬瓜でもない。
正男　ここで昨晩プロポーズしたんです。婚約指輪、あげたんです。
母親２　キス、した？
正男　いいえ、まだ。ハチの巣退治にきたお役人や一年のうち十か月はキャベツの千切りしてる女優さんが現れて、それで正子ちゃん、びっくり仰天した拍子に。
母親３　落としちゃったのね。
母親２　それでハチの巣突いた大騒ぎに。
母親４　ハチの巣はないけど、蟻の巣の観察

キットならあるわよ。見る？

正男　今日は遠慮します。

母親３　私が推理するに、そのミミズ千匹とかいう女優があやしいわね。

母親２　そうそう、ちょろまかし。きっと股の間に隠したのよ。

正男　それが、股間に隠していたのはダイヤではなくキャベツの芯でした。

母親２　ま、前衛。

正男　正子ちゃんは金だと思ったらしく。

母親３　場所が場所だけに。

正男　お暇でしたら、ダイヤさがしにご協力願えませんか。只とはいいません。名店のトンカツ、ごちそうします。

母親２　只は好きだけど、暇も好きなの、私たち。

母親４（急に乗り気になって）ヒレ？　それともロース？

正男　どちらでも。

母親４　みなさん、このかわいそうなお兄さんをお助けしませんせん？　私、トンカツは甲子園の県予選で敗れて以来口にしない主義だったけど。この際、主義をひん曲げて。

正男　ありがとうございます。

母親４　ところで、そのダイヤは甘栗サイズ？　それとも胡麻粒サイズ？

正男　……米粒の半分くらいは。

母親４　なるほど。火中に栗を拾うのでなく、砂粒から胡麻粒を選るようなものというわけね。これはやりがいがあるざんす。さあ、みなの衆。

母親２、３　合点だ！

母親４がシャベルで土をすくい、母親３が篩で選り分ける。正男は母親２と組む。

母親４　よいさ。

母親３　さらさら。

正男　こらさ。

母親２　さらさら。

杉本が入ってくる。

杉本　ちょっと、あんたたち。

母親２　誰、この人？（正男に）例のハチの巣役人？

正男　違います。

杉本　誰にことわってここを掘ってるんだ？許可を得たのか？

母親３　ま、横柄。

杉本　ここは個人の庭だ。勝手なことすると訴えられるぞ。

母親４　故人の庭なんでしょ。死んでるならいいじゃない。それともここに埋めたの？

杉本　その故人じゃない。まだ生きてる。たぶん。

母親４　じゃ、生き埋め？

杉本　ここは楠木太郎氏の庭なんだ。

母親３　楠木太郎？

母親４　太郎だか正成だか知らないけど、私たち、ダイヤをさがしてるの。邪魔しないで。

母親２　そうよ、ダイヤモンド。

杉本　おばさんたちが何を言うかと思えば（笑）。ダイヤだと？　冗談はよせ！

母親３　冗談じゃないわ。本気よ、ねえ。

正男　僕の幸福が、僕の一生がかかってるんです。

杉本　あのね、私は、今はリストラされた身だが、かつては天下の三友鉱山、東証一部上場の三友鉱山株式会社に在籍し、レアメタルの鉱脈を探して世界中を……。

正男、母親たち、杉本を無視して作業を続ける。

杉本　聞け！　私はボーリングの、穴掘りのプロなんだ。その私にダイヤが埋まっている土地かどうか、見分けがつかないとでも

思うのか！

母親４　うるさいわね、ボウリングのプロかゴルフのプロか知らないが。

母親３　どちらも穴と縁があるわね。

母親２　ボウリングに穴がある？

母親３　ボールに穴が開いてるじゃない、三つ。

杉本　そのボウリングじゃない！

母親４　私たちは、若者のプロポーズを応援したいだけなの。

母親２　そう、ボランティアなの。

杉本　タイヤの聞き違いじゃないのか。まったく、どこで話に尾ひれがついたものやら。

母親３　ダイヤが見つかれば、ロースかヒレがつくのよ。

杉本　私は、世界を股に。

母親４　わかんない人ね。股にダイヤは隠してなかったの。キャベツの芯なの！

杉本　ここには特別なものが埋まってるんだ。私の勘だ。元三友鉱山のエンジニアの。

田中　やれやれ、あなた、加藤さんの仲間だったんですか。これがほんとの同じ穴の狢。

いつのまにか、田中課長補佐が来ている。

正男　公園の課長さん。

田中　課長補佐。あれ、まだ見つかりません か？（杉本を指し）みなさん、こんな人、気にしないでいいですから。マンション屋の手先です。あのサファイア・マンションの。

母親２　サファイア？　あのマンション、サファイアっていうの？

母親３　それでダイヤを目の仇にするのね。

田中　どんどん掘ってください。気の毒な青年のためにダイヤをさがす奇特なあなたたちのことが話題になれば、楠木氏も放っておけないはず。気になって必ずここに現れる。

杉本（田中に）本気でダイヤが出ると思ってるのか？

田中　出るでしょ。私、現場にいたんだから。とはいえ、実物を見たわけじゃないですがね。でも冗談で他人の股間をまさぐったりはしない。

正男　正子ちゃん、立ち直れるか心配です。

田中　貴様、自分の彼女の心配か！　股間をまさぐられたひとみさんの心配はしないのか！

正男　だって……。

暗転。

9

同じ場所。午後一時頃。猫車やシャベルは放ったまま作業を止め、みんなどこかへ行ったらしい。かわりに少年Qとひとみ（私服）がいる。幽霊は起きて体操。

少年Q（ひとみに）セイレーン？

ひとみ　えっ？

少年Q　セイレーン。

ひとみ　私のこと？

少年Q　セイレーンだ。

ひとみ　清廉潔白かどうかは自信がないけど、ダイヤを隠したのは私じゃありません。

少年Q　セイレーンは海の魔女のこと。

ひとみ　やっぱり魔女なの。

少年Q　セイレーンの歌声を聞くと、船乗りたちは海へ飛び込んでしまう。

ひとみ　すごいね、そのセイちゃんって。でもお姉さん、音痴の人なの。

少年Q　だからマストに体を縛り付ける。誘惑に負けないように。

ひとみ　小さいのに誘惑なんて言葉知ってるのね。じゃあ、誘惑って漢字で書ける？

少年Q　書けない。

ひとみ　私、あなたくらいの頃、全然漢字知らなかった。漢字と相性悪くて。お姉さんひとみっていうんだけど、漢字だと目の横っちょに童って書くの（宙に書く）。もう、ごちゃごちゃしててね。自分の名前書くの面倒で、それから漢字嫌いになったみたい。でも漢字を知らないと、人生たいへんよ。今でも台本にふりがなふってるの。

加藤、入ってくる。

加藤（少年Qに）船長、おはようございます。加藤甲板員であります。

少年Q　乗船を許可する。

加藤（ひとみに）新しい船員の方ですか？

ひとみ　センイン？　セイレーンだと言われましたが。

加藤　はあ？

ひとみ　海の魔女だそうです。

加藤　今日はまた難しそうな設定だな……（辺りを見回し）あらら、何だよ。穴だらけじゃないか。工事か？　こりゃ、ひどいなあ。船長、これは？

少年Q　カリブの海賊どもとの戦いの跡だ。

加藤　杉本さんのしわざかなあ。（ひとみに）あなた、ご存知？

ひとみ　私も来たばかりです。昼間ここへ来たのは初めて。いつもは真っ暗なんで。でもやった人、わかります。実は昨晩……。

田中と母親４、楊枝をくわえて戻ってくる。

母親４　ああ、食った食った。

田中（母親４に）あれ、お仲間の方たちはどこへ消えちゃったの？

母親４　赤ん坊におっぱいやりに帰りました。それからお昼寝ざんすね。

田中　あなたは？

母親４　おっぱいないし、光ちゃん、冬瓜だし。

田中（加藤に気づき）加藤さん、あんた、何してるの？

加藤　そういうあなたこそ。

田中　ここらを掘ってるんです。

加藤　もしかして、これ、杉本さんが……。

田中　彼、さっきまでいたんだけど、道具を取りにいくとか言って……（ひとみに気づき）あっ、昨夜の女優のひとみさん。

ひとみ　どうも。

田中　今日はキャベツのお仕事の方はいいんですか？

ひとみ　クビになりました。眠くて眠くて、２ミリ幅のつもりが５ミリに。

田中　お気の毒に。シルバー人材センターならすぐ紹介できるんですが。

ひとみ　まだ見つからないんですか？

田中　ほじくりかえしているんですがね。

母親４　ねえ、この人？　股間にキャベツの芯を隠していた青虫女優って。

田中　すぐに美しい蝶になるんです。

ひとみ　あれ、芝居の小道具なんです。

母親４　キャベツの芯が？

ひとみ　ヴラジーミルって人が蕪と大根と人参を持っていて、それをエストラゴンという人にあげる場面の。

母親４　何だかさっぱりだけど、それがどうしてパンツの中に？

ひとみ（恥ずかしそうに）わたしのジャージ、ポケットに穴、開いてるから。

正男、遅れて戻ってくる。

正男　もう、食べたらさっさと帰っちゃうんだから。（ひとみに気づき）あれっ。

ひとみ　こんにちは。

正男　すみません。正子ちゃんが……。

ひとみ　いいんです。私が悪いんです。あんなもの、パンツに隠していたから。

少年Q　おまえたち、まだ乗船を許可していないぞ。
田中　何だ、Qちゃんか。
加藤　船長です。ここは彼の船なんですよ。あけぼの丸といって。
田中　知ってますよ。有名人だもん。あんたもその気になって（笑）。どうしたの、こわもての地上げ屋さんが。（少年Qに）おい、Qちゃん、そろそろ学校へ戻れよ。おじさんは教育課じゃないけどさ、いつまでも妹と船乗りごっこじゃないだろ。あれ、チビは？
少年Q　ペストだ。
田中　ペスト！
加藤　水疱瘡ですよ。
少年Q（田中に）おまえなんか、海軍の腰抜け提督だ。
田中　そんなに偉くないよ。おっちゃんは高卒のただの課長補佐だ……Qちゃん、今日はここを、あんたの船の甲板をほじくらなきゃならないの。ダイヤを見つけないと、このかわいそうなお兄ちゃんがプロポーズできないの、わかる？
加藤　わからないだろうね。私にもわからん。

杉本、戻ってくる。手に二股の棒を持っている。

田中　またややこしいのが。
杉本　あ、加藤さん。（Qちゃんに）船長、おはようございます。（田中に棒を見せ）これです、これ。
田中　何だい、それ？
少年Q　ダウジング・ロッド。
杉本　さすが、船長。
田中　何、その団地の玄人って。
加藤　ダウジング・ロッド。井戸を掘る人が水脈をさがすのに使ったものです。超能力のようなもので、あまり科学的とはいえないが。ハシバミの木を使います。

田中　別に井戸を掘ろうってわけじゃ。

母親４　水があると、そいつがビビッとくるの？

加藤　水脈さがすより、人脈さがして再就職すればいいのに。

杉本、集中している。
ロッド、動かない。

正男（杉本に）あの……。

全員　しっ。

田中　ビビッとこないのか。

加藤　そう簡単じゃないでしょ。

杉本（うまくいかない）……ダメだ！

正男　それより指輪を。

杉本　ダメだ！

加藤　杉本さん。

杉本　……ここには何かとんでもないものが埋まってるんです。気になるんです。

田中　ここは楠木太郎っていう変わり者の庭ですよ。それだけだ。何もない。

加藤　いや、私もここは不自然すぎると思う。何か不自然だ。私は穴こそ掘らないが、日本中いろんな土地を見てきた。土地にはそれぞれ顔がある。説明しにくいが、その土地が持っている気のようなものが……。

正男　怨念とか？

加藤　そういった霊的なものもあるでしょう。エネルギーというか。たぶん、杉本さんは職業柄、地面の下に何かただならぬものの存在を感じてるんでしょう。私も、ここは異様だと思う……田中さんだって、本当はそう思ってるんじゃないですか？

田中　……。

ひとみ　あの。

田中　何？

ひとみ　この公園、目の形に似ていません？私、ずっと思ってたんです。

田中　じゃあ、目のまん中に、ひとみさんがいるというわけか（笑）。

母親４　（杉本に）もうやめちゃうの？

杉本　私ではダメみたいです。誰か代わりに……（ひとみに）そうだ、あなた、あなたがいい。あなた、やってくれませんか。

ひとみ　え？　私？　無理です。芝居でやったことないです。

杉本　簡単です。要は集中力。

母親４　いいんじゃないの。こういう超能力みたいなのは女がやるに限るわ。

ひとみ　そんな、私、キャベツも満足に刻めなくてクビになった不器用な女ですよ。

母親４　女優というのはさ、巫女みたいなもんだから。

ひとみ　マクベスの魔女ならやったことあるけど。

ひとみ、杉本からダウジング・ロッドを受け取る。

ひとみ（杉本に）こうですか？

杉本　そう。何もしないでもロッドが、その枝が教えてくれる……はずです。

ひとみ　あっ、あっ、ああ。

ひとみ、よろける。それにつられて全員よろける。

舞台の上を右に左に何度もふられる。

ひとみ　あっ、いやだ、ダメ、やめて。お願い、許して、いっちゃう。いく、いく。

ひとみ、何とも紛らわしい声を出しながら、さんざんフェイントをかけた挙句に、ロッドの先っぽをクスノキの洞に突っ込む（実は幽霊が誘導して）。

ひとみ　入っちゃった！

田中　何と。

母親４　まあ。

ひとみ　だって、これが勝手に……。

加藤、洞の中を覗きこむ。

正男　そこにはハチが。

田中　ハチは退治したよ。

加藤　いろいろ入ってる。請求書にダイレクトメール。ゴミもすごいな。

母親４（杉本に）ねえ、今度は私がやってみようか？

加藤　あ、何だ、これ？……指輪、か？

ひとみ　指輪って、それ。

正男　見せてください！（加藤から指輪を奪う）……あった！　僕の給料三か月分が！

田中　すごいな、団地の玄人は。

母親４　あらま、ほんとに胡麻粒だわ。

田中　しかし、驚いた拍子とはいえ、指輪がそこまで飛ぶかなあ。

正男　みなさん、ありがとう。（みんなの手を握って）ありがとうございました。お騒がせしました。助かりました。よかった。これでプロポーズできます……じゃあ、約束のトンカツ、ヒレでもロースでもごちそうしますから。

杉本　……違う。見つけたいのは、そんなものじゃない。

正男（憮然）そんなものって……。

母親４　何言ってんの。見つけたかったのはこれよ。文句言うなら、あんたトンカツなし。

加藤（洞の中をさぐりながら）あれ。

田中　加藤さん、そこ、楠木太郎氏のなんだから。勝手にさぐりまわしちゃまずいよ。

加藤、洞から棒状のものを取り出す。

幽霊、近づく。驚く。

正男　何ですか？　金属っぽいですね、電気製品かな。

母親４　髭剃りじゃない？

加藤　いや、これは……。
少年Q　マイクロフォン。
田中　マイクロフォン？
ひとみ　マイクですか。音を録る。
加藤　マイクです。それもかなり高性能のやつだ。
田中　何でマイクが？
加藤　さあ、それは所有者の楠木太郎氏に聞いてみないと。
田中　楠木氏のものとは限らんじゃないですか。誰かが突っ込んだんじゃ。
加藤　これはどう見てもこの木の洞の中に仕掛けられたものです。（のぞき込んで）電気も引き込まれているようだし。発信機もある。電波で飛ばしてるんだ。
田中　洞の中にマイクを仕掛けるって……それはつまり。
正男　もしかして、盗聴？　ですか？
母親4　あら、いやだ！
ひとみ　誰が？
田中　そりゃ……楠木太郎氏でしょう。
ひとみ　どうして？
加藤　わかりません。だが、ここは楠木太郎氏の庭で、これは楠木太郎氏の木なのだから巣箱をつけようが、盗聴マイクを仕掛けようと勝手なわけです。
ひとみ　でも誰も、こんなものがあるとは知らなかった。
加藤　そうでしょうね（クスノキを調べている）。
正男　知らないままここに赤ん坊を連れて来る人もいれば、恋人たちも来るんですよ。芝居の練習をする人も来れば、航海ごっこの船長さんも来る。
田中　会社をクビにされた中年男も来れば、首を吊りにくるやつも来る。いろんな人が、ここはただの公園だと信じ込んでやってきて、みんなこの木のそばで……。
母親4　ぼやいたり、愚痴ったり、悪口言ったり、呪ったり、告白したり、謀ったり…

……。

正男　キスしたり、プロポーズしたり、エッチなことしたり、のぞいたり……。

ひとみ　聞かれていたんですね、全部。

母親４　つまり、その楠木ってやつはさ、ここにくる私たちの会話や独り言なんかを聞いて楽しんでいたってわけ？

加藤　会話だけじゃないようです。

全員　え？

加藤　ここをみてください（クスノキの葉をずらす）。ここに、こんなものが……。

田中　こりゃ……これは、監視カメラか。

加藤　監視カメラです。こんなのが仕掛けられてるとは。

母親４　カメラですって……のぞきじゃない、これって！

正男　のぞきですよ、犯罪だ。

加藤　いや……他人の家をのぞいているわけじゃない。ここは自分の庭ですから。

ひとみ　なぜそんなことを？

加藤　なぜでしょう。でもこれで楠木太郎氏がここに住まない理由も、居場所を知られたくない理由もわかりました。

正男　理由？　どんな理由があるんです？

加藤　それはたぶん……もちろん、あくまでこれは推測ですが。

田中　もったいつけなさんな。

加藤　楠木氏にとって、ここはいわば秘密の、大切な観察場所なんです。

ひとみ　観察場所？

加藤　おそらく、楠木太郎氏は生物の観察でもしてるつもりなんですよ。

母親４（乳母車から蟻の巣観察キットを取り出し）これよ！　これなのよ！

正男　なんですか、それ？

母親４　蟻の巣の観察キット、定価二千円。

加藤　そう。まさに、それ。

ひとみ　何だか気味が悪い。

正男　蟻ですか。僕たちは蟻なんですか？

田中　蟻のように毎日働いてはいるが。

母親４　馬鹿にして！　何様のつもり！　そのクスノキ野郎ってのは！

少年Ｑ　神様。

母親４　僕ちゃん、今、何て言ったの？

少年Ｑ　神様なんだ。

正男　神様って。

田中　神様か。

加藤　なるほど。

杉本　神……。

少年Ｑ　神様だよ。僕に贈ってくれたんだ、この双眼鏡。僕、プラスチックのしか持ってなかったから本物がほしいって、いつも言ってた。そしたら……。

加藤　Ｑちゃんは、前から見られてることに気づいていたんだ。

ひとみ　私もずっと誰かに見られてるんじゃないかって。

正男　神様をきどるためにこんなことするなんて……僕には信じられない。

加藤　結構楽しいのかも知れませんよ。

母親４　ああ、嫌！　悪趣味よ！　最低！（加藤に）あんた、そんなマイク、ひきちぎっちゃいなさいよ！

加藤　それこそ犯罪です。器物損壊。

正男　ねえ、課長さん。僕ら、他人の庭に勝手に入り込んでいるんだけれど、こういうものが仕掛けられてるって、みんなに伝えた方がいいですよ。

田中　課長補佐。市報にでも載せるの？　あけぼの三丁目の、公園のような楠木太郎氏の庭のクスノキにはカメラとマイクが仕掛けられています。盗聴されてます。のぞかれてますってか……いいじゃない、神様きどりしてたって。実害があるでなし。

正男　ほんとにないんでしょうか。

田中　足長おじさんをやってみたい屈折したジジイなんだよ。あんたのダイヤが見つからなかったら、もっと大きいのをプレゼントしてくれたかも。

正男　いりません、そんなもの。

田中　……もう関わるの、よそうや。

加藤　楠木氏からここを買い取って公園にするんじゃないんですか？

田中　これじゃ無理だ。あんたは？

加藤　私もあきらめました。

杉本　ここは神様の庭なんですか？

加藤　そういうことです。いわば人間観察キット。

少年Q　違う。あけぼの丸だ。

杉本　そうですよね、船長。それでこの甲板の下には一体何があるんですか？

少年Q　上甲板の下には中甲板。大砲が置いてある。その下は下甲板。士官以下の居室がある。その下には水や食料。調理室がある。船底にはバラスト用の石がある。

杉本　わかりました。ありがとうございます。

田中　どうかしてる（笑）。

少年Q　僕、帰る。スイミングスクールがあるから。

加藤　スイミングスクールですか（笑）。

少年Q、退場。

正男　僕も帰ります。指輪が見つかったこと正子ちゃんに知らせなきゃ。

正男、退場。

母親4　あ、あいつ、トンカツのことすっかり忘れてる。ちょっと、待ちなさいよ！こら、トンカツ、食わせろ！（正男を追いかける）

田中　あーあ、道具、ほったらかし。

ひとみ　じゃあ、私も。

田中　あの、ひとみさん。一緒にトンカツでもいかがですか？　ごちそうします。

ひとみ　でも私、住民税も払ってないし。

田中　じゃ、とんこつラーメンは？　九州ラーメンです。おいしい店、知ってるんです。

ひとみ　そのくらいなら。

田中　たくさん食べて、ベケットでもシェークスピアでもガンガンやっちゃってください。

ひとみと田中、並んで退場。加藤と杉本の二人が残される。そして幽霊。

加藤（杉本に）ラーメンでも食べに行きますか、僕らも。何だか腹減っちゃった。

杉本　……くうしゅう。

加藤　くうしゅう？　九州ですよ。九州ラーメン。

杉本　ラグビーボール、船、目……。

加藤　何ですか？

杉本　この庭の形です。なぜこんな奇妙な形なんだろうって。

加藤　理由がわかったんですか？

杉本　このあたりは戦争中、ひどい空襲があってたくさんの方が……。

加藤　田中課長も言ってましたが、それが？

杉本　似ていませんか、この形？

加藤　何に？

杉本　爆弾です。

加藤　ばくだん！　あの爆弾？　ドカーンの？　まさか……。

杉本　埋まっているのではないでしょうか。戦時中に米軍が落としたやつが。

加藤　不発弾のことですか。それはない。マンションをつくるときちゃんとチェックしましたが……。

杉本　楠木太郎氏は知っていた。

加藤　いくら形が似てるからって。

杉本　逆です。楠木氏はここに爆弾があることを示したいから、わざわざこういう形にしたんです。暗示です、いや神の啓示か。

加藤　仮に不発弾が埋まっていたとしましょう。自衛隊が処理してくれるんですよ。そんなもの後生大事にして何の得があるんです。怖くて家も建てられないし。大体近所迷惑だ……なぜ？　根拠は？　例の第

六感だけなんでしょ。

杉本　神になりたいからです。楠木太郎氏は、ずっとこの庭にやってくる人々を高みから観察してきた。Qちゃんのようにお恵みを受けた人もいた。神の恩寵。でも神は助けるだけじゃない。神は怒る。愚かな人間に、罪深い人間に罰を与える。罰せられた人もいたかもしれない……ならば彼は世界に破滅をもたらすような劫罰も用意しているはず。

加藤　待ってください。それがここに埋まっている爆弾だと言うんですか？

杉本　最後の審判（笑）。

加藤　六十年も前の……。

杉本　高性能マイクやカメラを仕掛けるような人です。起爆装置をつけることなど。

加藤　あなた、爆弾なんて簡単に言うが、二百メートル四方が吹っ飛ぶんですよ……あそこから、あのあたりまで全部……冗談じゃない。

杉本　……。

加藤　Qちゃんは、我らがあけぼの丸の船長は、明日もまたここに来るんですよ。夜になれば、ひとみさんがお芝居の稽古にやって来る。

杉本　……。

加藤　朝には俳句の会の母親たちが赤ん坊を連れて……そしてあのマンションには、もうじき大勢の家族が入居するんです。待望のマイホーム。こちら側にはベランダがある。天気のいい日には洗濯物を干すでしょう。サファイア号の満艦飾……冗談じゃない。爆弾だと……冗談じゃないぞ。何が神様だ。神だと！　ふざけるな、思い上がるな、畜生！

杉本　（おびえた声）加藤さん。

加藤　呪われちまえ、楠木太郎！　頭のいかれた、くそったれの卑怯者が！

杉本　加藤さん、やめて！

加藤　蛆虫、人間の屑、ど変態、異常者、詐

欺師、インポ野郎！

杉本　やめてください！　そのマイク、まだ生きてるんです。

加藤　えっ。

杉本　全部、向こうに聞こえてる。

幽霊、母親４の乳母車を蹴り倒す。勢いよく冬瓜が転げ出てぶつかる。砕け散る。杉本、加藤、一瞬凍りつく。が、冬瓜だと気づき、突然笑い出す。ヒステリックなくらいの馬鹿笑い。二人、肩を組んでそのまま退場。幽霊が一人残る。

幽霊　監視カメラとはおそれいったな（クスノキを見上げて笑う）……みんな、てっきり、俺のことを気にしてくれてると思ったら、こいつだったか。こりゃ、元探偵も形無しだ。

幽霊、動く。監視カメラが追う。カメラの視線を感じた幽霊、振り返る。

幽霊　えっ？

幽霊、動く。カメラ、追う。幽霊、素早く振り返る。

幽霊　ま、まさか……。

幽霊、カメラを見ながらゆっくり動く。カメラ、ゆっくり追う。

幽霊　俺が見えるってのか……馬鹿な、そんな馬鹿な！　こいつは人間観察キットじゃないのか。俺は幽霊だぞ。幽霊が見えるはずがない。誰にも見えるはず……。

幽霊、早く動く。カメラ、追う。さらに早く動く。追う。幽霊、座り込

む。

幽霊（息を切らせ）見張られてたのか、この俺も……ふざけやがって、この俺も手のひらの中って言いたいのか……やい、楠木太郎！　おまえは、おまえは一体……。

了